



## インフルエンザと麻疹について



まずインフルエンザについて。2018/2019年シーズンの1月のインフルエンザの患者数は、過去10年間で最も大きな流行となった**昨シーズンを上回る勢いで患者数の増加**が見られ、薬局サーベイランス (<http://prescription.orca.med.or.jp/syndromic/kanjyasuikei/index.html>) による2019年第4週(1月21~1月27日)の1週間当たりの全国の推定患者数は約228万人(大阪府は約14万人)となりました。中津医療福祉センター内の病院、各施設においても、インフルエンザ発症者が相次いで報告され、我々ICTも対応に追われています。この第4週をピークとして、第5週(1月28日~2月3日)以降はインフルエンザの患者数も減少に転じていく可能性が高いと予想されます。しかし、まだまだインフルエンザの流行が続いていくことには変わりはなく、**2月中はインフルエンザの流行には注意が必要**です。



次に麻疹についてです。既に院内掲示板にもアップしていますが、2019年に入って**大阪府内において麻疹の患者数の増加**が見られています(図)。大阪府の麻疹患者発生数は、2017年が10名、2018年が19名でしたが、2019年は1月26日までの4週間で既に26名(**発病者の年齢は10代~40代**)であり、大阪市内と豊能地区(箕面市、池田市、吹田市等)で患者発生が見られています。これは昨年の11月頃より始まった大阪府内での麻疹患者の発生とウイルスの府内での循環がまだ止まっていないばかりか、広範囲に伝播しつつあると考えないといけない状況になってきています。

既にご存知の方が殆どだと思いますが、麻疹は麻疹ウイルスによって引き起こされる感染症であり、空気感染、飛沫感染、接触感染と様々な感染経路を示し、その**感染力は極めて強い**ことが大きな特徴です。未だに有効な治療方法はありませぬ。現状のままでは、明日当院の外来に麻疹発症者が受診しても不思議ではありませんし、対応を誤ると院内感染につながる可能性があります。これからも折をみて報告させて頂く予定ですが、当分の間、病院の特に外来関係者におかれましては、ご注意頂きますようお願いいたします。(感染管理室 安井良則)

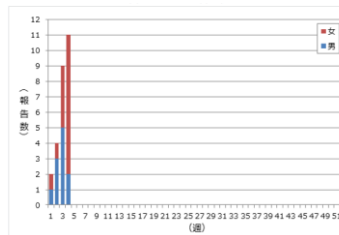


図. 大阪府内の麻疹の週別報告数(2019年第1~4週)(大阪府感染症情報センターホームページ <http://www.iph.pref.osaka.jp/kansen/zbs/zmsn.htm#h4>より)



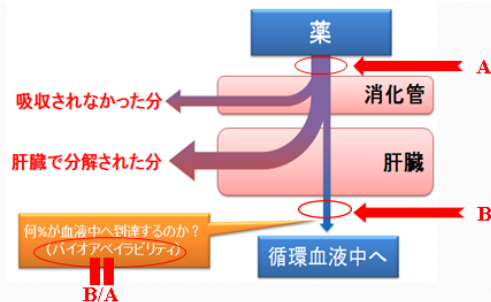
厚生労働省HPより



## 【御礼】抗菌薬スキルアップセミナー



11月に開催しました「抗菌薬の考え方」引き続き、抗菌薬スキルアップセミナー第2段として、1月24・29日に「内服抗菌薬の考え方」をテーマに研修会を行いました。今回は主に点滴薬のお話でしたが、今回は内服薬に焦点を当てた内容となっております。医師・看護師・薬剤師・リハビリ療法士などたくさんの職種の方にご参加いただき、ありがとうございました。講演の中では“bioavailability”という言葉が、繰り返し出てきました。普段、聞き慣れない方も多かったと思いますが、内服抗菌薬の使用にあたり、“bioavailability”の考え方がとても重要となってきます。研修会に参加したくても参加できなかった方のために、簡単に“bioavailability”についてご説明します。



### 【Bioavailability】

Bioavailability(バイオアベイラビリティ)とは人体に投与された薬物のうち、どれだけの量が全身に循環するのを示す指標であり、生物学的利用率ともいわれる。薬物が静脈内に直接投与される場合、Bioavailabilityは100%になる。一方、薬物を静脈内以外に投与する際は、全身循環に至るまでに不要な吸収や代謝を受け、その分Bioavailabilityは低下する。特に経口投与においては、Bioavailabilityを考慮した投与が必要となる。

また、今回の抗菌薬スキルアップセミナーは、近隣の病院やクリニックの医師、保険薬局の薬剤師の皆様に向けても開催し、講演会終了後には、医師や薬剤師より多くの質問が飛び交いました。薬剤耐性(AMR)対策は、まだまだ始まったばかりです。中津病院でも、抗菌薬適正使用支援チーム(AST)を立ち上げ3年が経過しようとしています。先日、第200回目となるASTカンファレンスを終了し、たくさんの方にご理解、ご協力、ご支援頂き、活動できておりますことを心より感謝申し上げます。(ICT川口/AST三木)

